

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『ヴァレンシュタイン』論 人間の道具的利用をめぐって：歴史書から歴史劇へ ― 異同とその意味
Author(s)	武田, 智孝
Citation	広島ドイツ文学, 36 : 1 - 22
Issue Date	2024-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055063
Right	Copyright (c) by Author
Relation	



『ヴァレンシュタイン』論 人間の道具的利用をめぐる 歴史書から歴史劇へ — 異同とその意味

武田 智孝

1. ヴァレンシュタインの平和 ... 反戦と反皇帝

時は 30 年戦争(1618-1648)半ばの 1634 年 2 月 23 日～25 日, ヴァレンシュタイン最後の 3 日間, 場所は Pilsen と Eger, とともにボヘミア, 現在のチェコである。

きっかけはスウェーデン国王にして連戦連勝のプロテスタント軍名将グスタフ・アドルフの戦死(1632.11.16)。これを好機と捉え戦争継続によって勢力拡大を図ろうとするオーストリア皇帝フェルディナント二世と, 逆にこれを機に和平に舵を切ろうとする総司令官ヴァレンシュタインとの対立がドラマの基本にある..., かに見える。

真直¹な青年士官マックス・ピッコローミニはウィーン宮廷からの勅使クヴェステンベルク軍事顧問に向かって「激しい口調で」, 「和平を妨げているのは貴方がたではありませんか! だからわれわれ軍人が無理にでも和平を勝ち取らねばならないのです。(中略) ヴァレンシュタイン公にとっては, オーストリアが勝ち取りたい領土の大小なんかよりヨーロッパ全体の幸せと繁栄の方が大切だからですよ」(P. I. 4)²と言ひ, ヴァレンシュタインも大詰め近く, 真意を確かめるべくやって来たパッペンハイム甲騎兵連隊の隊員たちを前に「君たちが戦の終わりを見届けることなどけっしてない。この戦争はわれわれすべてを呑み込んでしまう。オーストリアは平和など望んでいない, わしは平和を求める, だから失脚させられるのだ。長期の戦で軍隊が疲弊しようが, 世の中が荒廃しようがオーストリアにはどうだっていい, 奴らの狙いはただ一つ領土の拡張だけなのだ(中略)ドイツ人民衆の悲惨な状況は痛ましい限りだ。(中略) みんな敵か味方かで, どこにも仲裁者などおらん。どこで終わらせるか。ますます絡み合う糸の繯を誰が解きほぐすのだ, わしがその運命の男だと思う, 君たちの助けを借りてやり遂げたいのだ」(WT.III.15)³[傍点引用者]。

¹「まっすぐ」でもある。gerade/krumm の対立はしばしば話題になる。

²P.は Wallenstein 三部作第二部 Die Piccolomini, ローマ数字は第何幕かを, アラビア数字は第何場かを指す。以下同じ。底本は:

Wallenstein. In Friedrich Schiller Sämtliche Werke Band II. München, Wien 1985.

³WT.は Wallenstein 三部作第三部 Wallensteins Tod, ローマ数字は第何幕かを, アラビア数字は第何場かを指す。以下同じ。

だが戦争屋である傭兵隊長の平和主義とはどのようなものか、その背後に何があるのか。ピルゼン郊外に陣を張っていっこうに動こうとしないヴァレンシュタイン軍に業を煮やしたウィーン宮廷から遣わされてきたクヴェステンベルク軍事顧問との会談の席でヴァレンシュタインは次のように言っている。

だがレーゲンスブルクの諸侯会議、あそこが事の発端だった。そこでわしがどんな財源から戦費を捻出しておったかが知れ渡ったのだ。皇帝の忠実な下僕たるわしが民衆の怨嗟的となった、ただひたすら皇帝の勢力を拡大して差上げた戦争、それにかかった費用を諸侯(とその領民)に支払わせた、その報いは何だったか。わしは奴らの苦情の生贄にされたのだ。司令官解任だ。

(中略)

帝国に負担を強いて皇帝に奉仕した結果わしはひどい目に遭ったわけだ、あれ以来帝国についての考え方が変わったのだ。確かにこの元帥杖は陛下から戴いたものだ、しかしこれ以後わしはこの権限を帝国の将軍として帝国人民すべての幸せのために、帝国全体のために使うつもりだ、皇帝御一人の勢力拡大のためにはなく」

(P. II. 7)[傍点引用者]

大きな転換点(Peripetie)は 1630 年 8 月レーゲンスブルク帝国諸侯会議にあった。そこにおいて、ヴァレンシュタインはそれまで輝かしい戦果を挙げて来たにもかかわらず突如総司令官を罷免された。解任の理由は領主領民に「負担を強い」たことにある。彼は占領地に対して、放火略奪を免れたければ然るべき額の金品を差し出すよう義務付ける軍税制度(Brandschatzungen)を考案し導入した。『三十年戦争史』では「脅し取る(erpressen)」と結びついて使われる場合もある。(G. 687)⁴ この軍税システムによって得た資金力で傭兵を募り、給与を支給し、勇者には惜しみない褒賞を授ける。将兵たちにおけるヴァレンシュタイン将軍の人望がいかに厚いかは第一部『ヴァレンシュタインの陣営』に見ることが出来る。結局これも皇帝の勢力拡大のためであったが、この税制は実際の放火略奪よりマシではあったものの過酷な取り立てによって地域を疲弊させ、地方領民たちの怨嗟的となっていた。諸侯、つまり各地方領主たちは帝国議会において民衆の窮状を訴え、ヴァレンシュタインの罷免を要求し、皇帝はこれを受け容れたのである。

軍は確かにヴァレンシュタインが募集した傭兵隊である。兵に支給すべき給与を始め戦費はすべて総司令官(傭兵隊長)が自前で都合しなければならぬ。そのためにやむなく導入した軍税制度である。しかしこれはすべてカトリック連合、オーストリア・ハプスブル

⁴ G.は Geschichte des Dreißigjährigen Kriegs. 底本は

Schiller, Friedrich: Geschichte des Dreißigjährigen Kriegs. In Friedrich Schiller Sämtliche Werke Band IV. München, Wien 1985. アラビア数字はページ数を指す。以下同じ。

ク皇帝へ勝利をもたらすために不可欠だったものであり、実際に^{かっかく}赫々たる戦果を挙げてもきた。にもかかわらず皇帝は諸侯からの突き上げに遭うや、領民疲弊の責任をすべてヴァレンシュタイン一人に押し付け、総司令官職を解任したのである。彼は「皇帝のわしに対する扱いはひどいものだった」(P. I. 5)と言い、「生贄にされた(aufgeopfert)」という表現を二度も(P. II. 7), (WT. III. 15)使っている。

Walter Hinderer は「皇帝に信頼を裏切られたと思い込んで(dem vermeintlichen Vertrauensbruch)」[傍点・強調引用者]⁵と、これがヴァレンシュタインの被害妄想であるかのように書いている。その理由は記されていないが、『三十年戦争史』によると、ここにはオーストリア皇太子のローマ王推挙の問題が絡んでいた。神聖ローマ帝国皇帝に選出されるためには先ずローマ王に就いておくことが必須の条件だったから、選帝侯たちはこの案件の成否とヴァレンシュタイン解任を天秤にかけながら皇帝を追い詰めたのである。

(G. 489)

ドラマではこういった^{いきさつ}経緯は省かれ、ただ「閣下もご存じのとおり、あの不運極まる帝国議会において陛下におかれては裁量の余地がおありにならなかったのです」と勅使クヴェステンベルクが釈明し、「何をバカな。わしに任せておけば陛下には自由な決断がお出来になれたはず」(P II. 7)とヴァレンシュタインが応ずる、簡単なやりとりのみに留められている。

いずれにせよヴァレンシュタインが皇帝側の事情で罷免されたことに変わりはなく、被害妄想などではない。彼は道具的に使い捨てられたのである。また、自尊心の強い彼にとっては、「信頼を裏切られた」こと以上に、誇りを傷つけられた屈辱感の方が大きかった。

だが皮肉なことにヴァレンシュタイン罷免から約半年後の 1631 年 1 月スエーデン国王にして名将グスタフ・アドルフが戦線に加わり、その勢いはとどまるところを知らず、わずかに対抗しえたカトリック側将軍はティリーのみであったが、そのティリーが戦死(1632.4.30)した後はもはやスエーデン軍の快進撃を阻むことの出来る指揮官はいない。皇帝はいったん解任したヴァレンシュタインに復帰を乞うしかなかった。(P. II. 7), (WT. I. 7)

ここで彼は相手の弱みに付け込み、託された皇帝軍に関して全権を自分に委ねるよう条件を付けた。ドラマでも「司令官を引き受けるにあたっては必須の条件があった。条件の第一は、何人であれ、たとえ皇帝といえども軍に口出しはまかりならん。結果に対して私が名誉と命を懸けている以上、全権は私にある」(P. II. 7.)とヴァレンシュタインは言っている。軍に対する全権^{こゝろ}掌握が後に公に対する宮廷側の警戒感と疑心暗鬼を生む原因になった。

再任に応じてから以後の彼の態度、行動は戦意を疑わせるに十分なものがあつた。敵将グスタフ・アドルフの戦死はプロテスタント軍追撃の絶好の機会であつたにもかかわらず

⁵ Hinderer, Walter: Wallenstein. In: Interpretationen Schillers Dramen. 2011, Stuttgart. S.246.

ず深追いせず、新教軍がバイエルン領に攻め込んだ際には、再三の援軍要請にも耳を貸さうとしなかった。二年前のレーゲンスブルク諸侯会議でヴァレンシュタイン追い落としに最も積極的に加担したバイエルン公マキシミアンに対する腹癒せである。『三十年戦争史』には「確かにバイエルン選帝侯に対する彼の態度は立派とは言い難い復讐心(Rachsucht)と執念深さ(unversöhnliche[r] Geist[e])を証するものではある」(G. 688) [傍点引用者]とコメントされている。

彼は皇帝やウィーン宮廷に対しても嫌がらせを辞さない。1633年シュタイナウの会戦でスエーデン軍が降伏した際、天の配剤というべきか、かのマティアス・トゥルンが捕虜となった。長期に亘る宗教戦争の発端となった「ブラハ城窓外放擲事件」⁶(1618.5.23.)の首謀者である。カトリック、ハプスブルク側にとっては憎んで余りある戦犯だった。ウィーンの宮廷も市民も身柄引き渡しの上、市中引き回し、公開処刑をと手ぐすね引いて待ち受けていたが、「この皇帝の仇敵は罰せられるどころかたくさんのお土産まで頂戴して釈放されてしまった」(P. II.7)とクヴェステンベルクは慨嘆する。対するヴァレンシュタインは「あなたがたウィーン子たちは囚人引き回しの車に縛りつけられた国賊を見物せんものと大通り沿いの窓やバルコニーを予約しておったのだろう。わしが戦に負けてもぼろくそに言うくらいで収まるだろうが、絶好の見世物を見せてもらえなかったとなると、さぞかし恨み骨髓じゃろうて」(P. II.7)と皮肉たっぷりに応じている。

皇帝の戦争続行とヴァレンシュタインの和平方針は一見戦争か平和かの対立と見えても、その裏に両者の確執があり、真直な青年士官マックス・ピッコローミニが思っているほど純粋なものではない。パッペンハイム甲騎兵連隊の隊員を前にしたヴァレンシュタインの演説にしても、「わたらの陣営から歓喜に沸く世界へと美しい花輪で飾られた平和を届けるのだ(der erfreuten Welt aus unserm Lager/Den Frieden schönbekränzt entgegenführen)」(WT. III.15)といった大仰な表現には、若い隊員たちを何としてでも味方に引き留めるべく大見得を切って見せた気配が感じられる。マックスはもとよりヴァレンシュタインの主張にも理想主義的美化、正当化の傾向が認められる。マックスは心底から、ヴァレンシュタインはある程度意識的に。

「皇帝御一人の勢力拡大のためではなく」「帝国人民すべての幸せのために、帝国全体のために」という麗しい発言の裏には、皇帝に忠誠を尽くし、勝利を重ねたあげく、軍税の責任を総て彼一人に押し付けて使い捨てにしたフェルディナント二世の専横不埒に対する怒りと悔しさがある。皇帝のために戦うことの空しさの体験が、戦争そのものの空しさの意識に繋がった、それが彼の口にする平和主義である。皇帝の戦争継続方針に反対する彼の姿勢には、反戦と反皇帝が縋い交ぜになっている。彼の平和志向は謀反の可能性を孕

⁶ 1618年5月23日、民衆によって王の使者たち5名が、ブラハ城3階の窓から投げ落とされた事件、三十年戦争の発端となった。詳しくはどうか Google で調べていただきたい。ググれば簡単に分る項目に関してまで注を付けまくる悪習は廃すべき。

んだ危険な構造になっている。

だが相手は皇帝、「歳月の力によって神聖化された」(WT. I. 4)権威に対する万民の盲目的尊崇の念への警戒から、「忠誠(fromme Treue)」こそ我が身を守る最高の盾(WT. I. 6)だとして行動に踏み切ることを躊躇うヴァレンシュタインはイッローやテルツキ夫妻らに叱咤鼓舞されて、ようやく謀反への重い腰を上げる。しかし彼の予感は的中し、将兵の大半は皇帝側に寝返り、彼が最も信頼していたオクタービオ・ピッコローミニの裏切りにも遭い、反乱は未然に鎮圧され、彼自身は部下によって殺害される。

2. ヴァレンシュタインの暗殺者とその動機 ... 歴史書から歴史劇へ

史劇『ヴァレンシュタイン』(1798-9)はその数年前シラー自身によって書かれた史書『三十年戦争史』(1791)を基礎にしている。しかし「歴史其儘」ではない。最も目を引くのはマックス・ピッコローミニとテークラ、若い二人の恋とその悲劇的結末であろう。このフィクションは鮮烈な印象を残すが、筆者の関心はそれほど華やかではない別のある変化の方に引かれる。それはドラマの最終部分、ヴァレンシュタインの暗殺者と暗殺に至る経緯、動機に関わる変更である。そこにはこのドラマの核心的問題の一つが潜んでいるのではあるまいか。

歴史書における暗殺者はレスリーという男である。

フリートランド公(ヴァレンシュタイン)が敵側と盛んに交渉し、星占いから期待を膨らませていた頃、公のほとんど目の前でその命を奪うことになる刃が研がれていた。公を法律の保護外に置くという勅令は^{おぼろ}過たず効果を顕し、正義の鉄槌(die rächende Nemesis)が下って、忘恩の徒(der Undankbare)は忘恩の所業によって(unter den Streichen des Undanks)斃されることとなった。公に仕える将校たちの中にレスリーというアイerland人^{アイルランド}がいて、ヴァレンシュタインはこのほかこの者に目を掛け、その出世栄達はすべて公のお蔭であった。ところが公への死刑判決を執行し血の報酬を受けるべく天命を帯びているのは自分だと思ったのがまさにこの男だったのである。(G. 681f.)
[傍点引用者(斜字体は原文のまま)]

レスリーは人生最大の恩人である將軍を褒賞と出世目当てに殺害する。それをシラーが「忘恩の所業」と評するのは当を得ているが、弑虐されたヴァレンシュタインをも「忘恩の徒」と呼ぶのは何故か。それはこの少し前に出てくる以下のような記述によって説明がつくのではあるまいか。

ヴァレンシュタインの(謀叛の[訳者注])目論見はすべて忠義・忠君の壁に当たって潰えた。彼は荒くれ者の兵士たちを束ね御する自らの威信を恃むあまり、すべては我が偉大のせいと思い上がり、どこまでが自分の力で、どこまでが拝命した官位に負うて

いる(dankte)のか判断できなくなっていたのである。皆が彼の前に恐れおののくのは、彼が正当な(recht-mäßige)権力を行使しているからであり、彼への服従が義務だからであり、彼の権威が皇帝の威厳にしっかりと支えられていた(an die Majestät des Thrones befestigt)からである。偉大というだけでは感嘆や恐怖を呼び覚ませはしても、畏敬や恭順を強いるには偉大さに正当性のお墨付き(die legale Größe)が必要なのである。仮面を剥いで謀反を宣言した時、ヴァレンシュタインは正当性という決定的な強みを擲ってしまったのであった。(G. 673f.) [傍点引用者]

皇帝から賜った最高司令官という官位のお蔭でヴァレンシュタインの威厳は保たれ、皇帝の威光によってその権威が支えられていたのに、すべては自らの実力によるものと思いがあって謀叛に踏み切った。その途端、皇帝による正当性のお墨付きを失い、将兵の大半が將軍から離反して、計画は失敗に終わる。身の程知らずからの忘恩(Undank)に対する罰、これが史書『三十年戦争史』におけるヴァレンシュタイン暗殺に関するシラーの判断であった。

Nemesis はしばしば「復讐の女神」と訳されるが、正義の裁きを行う女神が正しい。ギリシャ神話の Nemesis は Hybris(人間の思い上がり)に対する罰、償いを意味した。

確かに歴史書に描かれたフリードリヒ公は、「その野心は限りなく、自尊心は鋼のごとく、復讐することなく侮辱を耐え忍ぶなどあり得ない矜持の高さ(Grenzenlos war sein Ehrgeiz, unbeugsam sein Stolz, sein gebieterischer Geist nicht fähig, eine Kränkung ungerochen zu erdulden)」(G. 490) [傍点引用者]と評されており、罷免された將軍の怒りと復讐心はドラマに描かれているのとは比較にならぬほど激しく執拗なものであった。

解任後ボヘミアに息をひそめていたヴァレンシュタインが快進撃を続ける敵将グスタフ・アドルフに働きかけ、共に手を組んでウィーンを攻め皇帝をイタリアへ放逐する復讐計画を実行しようとしていたことが記されている。(G. 590f.)

警戒したスウェーデン国王が乗ってこなかったためにこれは実現しなかったが、ここで諦める男ではない。今度はグスタフ・アドルフとオーストリア皇帝を同時に復讐の標的とする計画を立て、反オーストリアのプロテスタント領邦ザクセンに働きかけてスウェーデンとの同盟から引き剥がそうとし、ボヘミアを攻めるにまかせ、さしたる抵抗もせず占領させてオーストリアに打撃を与え、更にスウェーデン軍のとどまることを知らぬ快進撃によって追い詰められたウィーン宮廷にいる味方の廷臣たちを使って、ヴァレンシュタインの罷免という誤った判断がこの結果に繋がった、かの名将がもし指揮を執り続けていたならば事態は全く違ったものとなっていたであろうと吹き込ませて、窮地に立たされた皇帝がついに膝を屈して総司令官への復帰を懇願してくるところまで持って行った。(G. 592ff)

これらはすべてドラマには出て来ない。

皇帝に対するかくも激しい復讐心と執念深さ、自尊心の高さがドラマにおいてはどのように変更されたか、それは以下のヴァレンシュタインの独白に見ることができる。

お前が揺るがそうとしている相手は盤石の王座に君臨する権力だ、歳月の力によって神聖化され、習慣の中に根付き、素朴な民衆に崇められ、世の仕組みの中に無数の根を張り巡らしている。これは力と力の戦いではない、それなら怖くはない。(中略) わしが怖れているのは目に見えない敵なのだ、それは人の心にあつてわしに逆らう、畏れ多い存在と見なされている、それだけでわしにとって怖い敵なのだ(Durch feige Furcht allein mir fürchterlich), 力強い生身のものではないのに、そいつがおそろしく危険なのだ」(WT. I.4)

ここでは「正当性のお墨付き」が何故それほど重要不可欠なのかがヴァレンシュタイン自身によって分析されている。「歳月の力によって神聖化された」権威に対する「畏れ多いという気持ち」、この理性的判断以前の感情が万民の心の中に根付いていて、それが皇帝権力の根幹にある。そういう皇帝の後ろ盾があつて初めて民衆の尊敬と支持が得られるのだ。皇帝に刃向かい、我が権力の基盤である皇帝の威光を蔑ろにすること、皇帝を尊崇する衆人全般を敵に回すことを意味する。ドラマのヴァレンシュタインは「正当性」の重要性を理解している。歴史書に於けるように自らの権力が皇帝から「拝命した官位のお蔭である」ことを忘れて自らの力を過信し、「思い上がりからの忘恩」行為に走るような無謀さはドラマの将軍にはない。彼は逡巡する。

史書に見るヴァレンシュタインの狷介不羈の側面はドラマではある程度までイッローやテルツキ夫妻らに移され、躊躇う主人公を叱咤し、煽り、唆す役割が彼らに割り振られている。「忠誠(fromme Treue)」こそ我が身を守る最高の盾だと言うヴァレンシュタインに向かってテルツキは「世の中を動かしているのは利害関係なんだよ」(WT. I.6), 「問題は義務だの正義だのじゃなく力と潮時なんだ」(WT. I.7.)と説き、間諜ゼジーンが捕らえられスエーデン軍に宛てた密書が宮廷側の手に渡ったことによって彼らの企みがすべて相手側に知られてしまったその期に及んでもなお「忠義だの良心だのとほざいている」(WT. I.7)ヴァレンシュタインに呆れかえったテルツキ伯爵夫人によって、二年前レーゲンスブルクでの皇帝の裏切りによる屈辱的罷免を想起させられ、今さら忠君だの義務など口にしていない段階ではない、「勝てば官軍、赦されるのよ」(WT. I.7.)と煽られ、自尊心をさんざん刺激されたあげくようやく彼は肚を固めるのだが、その前、行動に踏み切るよう迫るテルツキとイッローに対してなおも、「言っておくがな、忠義こそどんな人間にとっても血を分けた親兄弟にも等しいものなのだ、この徳を侵す者には復讐するのが当然と皆思っている」(WT. I.6)と言っている。

ヴァレンシュタイン・モノログにおける皇帝権力の分析は権力の根拠を暴き、権威を相対化した。これは啓蒙による皇帝権力の脱魔術化(Entzauberung)である。謀反は傲慢(Hybris)からの忘恩(undankbar)の所行ではなく、単なる無思慮による愚行にすぎない。ドラマのヴァレンシュタインは史書に比べてより謙虚ではなく、より賢く、慎重になって

おり、周囲から嫉けられ、勝ち目がないことを承知しながら事態の流れの中で反乱に踏み切らざるを得ないところへと追い詰められて行く形になっている。

Nolbert Oellers によると史劇出版に際してシラーは唐草模様の Nemesis 像をタイトル脇の扉に掲げるつもりであったが、これを取りやめた。古代ギリシャと違って、正義の裁きを下す女神 Nemesis のようなこの世のものならぬ(jenseitig)超越的な力を介入させるには後代においては説得力が不足している。それには「歴史哲学的、あるいは更に宗教的な幾つかの前提が必要で、そういうものはこのドラマに合わない」からだという。⁷ Peter André-Alt も同じことを指摘している。⁸

だが彼が謀反に踏み切るのは周囲から煽られたからばかりとは言えない。忠君の偉業が2年前レーゲンスブルクでひどい報われ方をし、そこで受けた裏切りと辱め(Kränkung)への恨みが彼の胸中に蟠り続けていたためでもある。

ドラマでの暗殺者はブトラー。レスリーと同じアイルランド出身⁹だが、暗殺に至る経緯や動機は大きく異なる。ブトラーは暗殺に際して手下の者たちを使い、自らの手を汚しはしないが、反ヴァレンシュタインの急先鋒であり、その命を執拗につけ狙う。彼がいなければドラマにおいて暗殺は起こりえなかったであろう。そこに至る経緯は以下の通りである。

フリートラント公ヴァレンシュタイン謀反の情報が入るや皇帝は直ちに公の総司令官職を解き、法律の保護を剥奪し(verurteilt und geächtet) (P.V.1)、捕虜とするなり殺害するなり、その身柄を差し出すよう(ihn zu liefern, lebend oder tot) (WT.IV.2)勅令を発する。

全権を託された忠臣オクタービオ・ピッコローミニは目的達成のため一人でも多くの有力将校を自陣営に引き込む必要に迫られる。相手の性格に見合った抜け目ない切り崩し作戦が功を奏し、軽佻浮薄な連隊長イゾラーニなどは、ヴァレンシュタインからの金銭援助によって幾度となく負債を帳消しにされ、窮地を救われた恩義があったにもかかわらず、「我が軍の全将校は忠臣オクタービオ・ピッコローミニ中将の命令を余の命令と見なすべし」という「玉璽の捺された皇帝直筆の勅書」(WT.II.5)を見せられたとたん腰砕けとなり、いとも易々と皇帝側に寝返ってしまう。まさしく「歳月の力によって神聖化された」権威の威力が発揮された形であるが、歴史書の浅ましい忘恩の徒レスリーがドラマでは、その賤劣ぶりがかなり希釈された形で、この軽薄な恩知らずイゾラーニに引き継がれている事実も見逃せない。

ブトラーは同じアイルランド出身だが、レスリーのような卑劣漢ではなく、イゾラーニほど柔^{やわ}でもない。彼は厩^{うまや}での下働きから始めて、戦争のお蔭で「気紛れな運に弄ばれな

⁷ Nolbert Oellers : Wallenstein. In Schiller Handbuch. Leben-Werk-Wirkung. Hrsg. von Matthias Luserke-Jaqui. 2011. Stuttgart, Weimar. S.150f.

⁸ Peter André-Alt. Schiller. Eine Biographie. Leben – Werk – Zeit. München 2009. Band 2. S.456f., S.461ff.

⁹ ドラマではスコットランド出身とされている。

がら」連隊長の地位にまで昇進して来た。「司令官殿も幸運の申し子。同じ愛しい仲間なのです」(P.IV.4)、身寄りのない自分が死ねば全財産は指揮官殿に遺贈するつもり、とまで言うほど将軍に心酔していた。彼は勅使クヴェステンベルク軍事顧問に向かつて、皇帝が軍隊を招集してその指揮権をヴァレンシュタインに委ねたというが、兵の大半は外国人だから特定の国に対する忠誠心などない。フリートラント公への信望があつて初めて軍は一つにまとまったのである。軍を造ったのは皇帝ではなくヴァレンシュタインなのだ。われわれは皇帝に司令官を与えられたのではなく、ヴァレンシュタインを通して初めて皇帝を主君と仰ぐのであると言つて、勅使をたじろがせたほどである。(P. I .2) オクタービオの説得にも耳を貸さず、何があろうと元帥と運命を共にする覚悟であると言いつつ。

彼が席を蹴って立ち去ろうとしたまさにその時、オクタービオは狙いすましたかのように、伯爵位叙勲申請が不調に終わった一件を持ち出す。ブトラーはヴァレンシュタインに勧められるまま申請書を提出したところ、ウィーン宮廷からけんもほろろに却下された。推挙してくれた将軍には深く感謝していたが、彼の勲功に一顧だに与えず侮蔑的な言葉まで連ねて門前払いを食らわせた皇帝に対しては強い恨みを抱くとともに、身の程もわきまえず爵位などに触手を伸ばした自分の浅はかさを深く恥じてもいた。

そのような忌まわしい過去を今さらつつき出された彼は激しく反発し、一度は剣の柄に手をかけさえする。激昂する相手を宥めつつオクタービオは叙勲申請が不首尾に終わった真の経緯を話して聞かせる。伯爵位叙任申請を強く勧めたヴァレンシュタインその人こそが実はその裏で所轄の大臣に書簡を送り、請願を却下して申請者の不遜を懲らしめるよう働きかけていたというのである。オクタービオは証拠として総司令官直筆の大臣宛書状を見せる。手紙を読み終えたブトラーの驚愕は、「膝が震え、椅子を掴んで、へたり込む (*seine Knie zittern, er greift nach einem Stuhl, setzt sich nieder.*)」(WT. II .6)とト書きにある。¹⁰

「ヴァレンシュタインは陛下への恨みを掻き立てることで君を陛下から引き離そうとしたのだ(中略) 卑劣にも君をただの道具として、邪悪な目的のための手段として利用しようとしたのだ(*Zum blinden Werkzeug wollt er Euch, zum Mittel/Verworfenner Zwecke Euch verächtlich brauchen*)」(WT. II .6) [傍点・強調引用者]とオクタービオは追い打ちをかける。

ブトラーは伯爵位申請を宮廷から取り付く島もないほどにすげなく却下された時「好き勝手に踏んづけられりや虫けらにだって棘がある」(WT. II .6)と言っていたが、司令官によって反皇帝勢力拡大のために道具として利用され弄ばれたことを知った時の彼の憤りはそれを上回るものであった。ヴァレンシュタインへの尊敬と信頼が厚かった分一層その裏切りに傷つく度合いも深く、自尊心をも踏みこじられたブトラーは反ヴァレンシュタインの急先鋒へと反転し、復讐の鬼と化す。「あいつからただ離れるですって? とんでもな

¹⁰ オクタービオの裏切りを知らされた時のヴァレンシュタインの反応は *Wallenstein sinkt auf einen Stuhl und verhüllt sich das Gesicht.* (WT.III.8) とト書きにあり、相同性が興味深い。

い! 生かしてなんかおくものですか!」(WT. II. 6)

ドラマに於ける暗殺の動機は歴史書の「忘恩」から、信頼を裏切られたことへの怒り、道具として利用され弄ばれたことへの屈辱感、そしてその復讐へと変わる。

暗殺されるヴァレンシュタインの罪も「思い上がりからの忘恩」ではなく、大逆罪の他に、自陣営拡大のための道具として部下を利用することでその人格を踏みにじったことの罪へと変更された。

3. 手紙は本物か

ところで、ヴァレンシュタインがウィーン宮廷の大臣宛に書いたとされる手紙に関してだが、これははたして本物だったのか、それともオクタービオの手になる偽物だったのか。

偽手紙というのはシラーの最も好んだモチーフの一つで、既に『群盗』、『たくらみと恋』、『ドン・カルロス』で効果的に使われていたから、ここでも疑ってみる価値は十分ある。

ReclamのErläuterungen und Dokumenteには、「イッローあるいはイゾラーニの伯爵位申請の話が史料に載っている。以前の解釈では、欺いたのはオクタービオではなくヴァレンシュタインだというのが定説であった」¹¹とある。つまり件の手紙は偽物の可能性があり、オクタービオが偽手紙によってブトラーを誑かし、反將軍、親皇帝陣営へと引き込んだ、という解釈が現在では出て来ているということである。実際 Müller-Seidel はオクタービオがヴァレンシュタインを中傷(Verleumdungen)したのだと言っている。¹²

他方 Peter André-Alt や Walter Hinderer は手紙を端から本物として疑っていない。¹³

Karl S. Guthke はこの問題を扱った論文を幾つか挙げているが、手紙の真偽はどちらでもよいという立場で、「重要なのはオクタービオもブトラーもヴァレンシュタインのこの振舞をいかにも大いなる策士の企みそうなこと(Spiel des großen Intriganten)と見ている点だ」¹⁴と述べている。しかしオクタービオはともかく、ブトラーはその時点ではまだ司令官をそんな人間とは見ていなかった。

注目すべきは Erläuterungen und Dokumente がほのめかしているように、『三十年戦争史』にイッローに関して次のような経緯が記載されていることである。

¹¹ Friedrich Schiller Wallenstein. Erläuterungen und Dokumente. 2005. Stuttgart. Hrsg. von Kurt Rothmann. S.85.

¹² Müller-Seidel, Walter: Friedrich Schiller und die Politik. Nicht das Große, nur das Menschliche geschehe. München. 2009 S.141.

¹³ Peter André-Alt. a.a.O. S.441.

Hinderer, Walter: a.a.O. S.205.

¹⁴ Guthke, Karl S.: Schillers Dramen. Idealismus und Skepsis. 2. Erweiterte und bearb. Auflage. Tübingen 2009, S.186.

ヴァレンシュタインは同志徒党を増やすためとあらばどんな陋劣極まる手段をも厭わなかった(*auch die niedrigsten Mittel nicht verschmäht hatte*)。ある時彼はイッロー大佐をウィーン宮廷に伯爵位を申請するよう説得して、自からも極力の推薦方を約束した。だが彼はひそかに大臣に宛てて書簡を送り、その請願を却下するよう、さもないと同程度の功績をあげた者たちが次々に同様の褒章を要求することになるから、と伝えた。その後イッローが戻ってくるや、將軍はいの一番に請願の成否如何を尋ねた。不首尾に終わった旨告げられると、彼は宮廷に対する痛烈な憤懣を吐露し始めた。「我々が忠義を尽くしたことへのこれが報いか。わしの執り成しは足蹴にされ、貴公の勲功に対してこんな些細な報償をすら拒むとは。誰がこんな不誠実な主君にこれ以上忠誠など尽くすものか。他人はいざ知らず少なくともわしは今後オーストリア・ハプスブルク家に与することは決してしないぞ」イッローは賛同し、こうして両者の間に緊密な盟約関係が結ばれたのである。(G. 671) [傍点・強調引用者]

ドラマのブトラー・ストーリーは史書のイッローに関するこの記述なしには考えられない。しかしドラマ・テキストから明らかなのは、ブトラーがヴァレンシュタインに勧められて宮廷に伯爵位申請書類を提出したが、にべもなく却下されたというところまでである。そこまではオクタービオ/ブトラーのやり取りから確認できる。史書でイッローに関して用いた「陋劣極まる手段」をドラマでも將軍がブトラーに対して使ったかどうか、確実なことはテキストからは読み取れない。ただ、オクタービオは面従腹背、仮面を被り、真意を隠すことでヴァレンシュタインを欺きはするが、こんな偽手紙まで用意して人を誑かすほど手の込んだことをやる悪党とは思えない。

筆者は、ドラマにおいて歴史書の記述にずらりと捻りが加えられたと推測する。味方を増やすためとあらば「陋劣極まる手段をも厭わなかった」という史書の表現に込められた批判にドラマにおいて具体的な形が与えられたという読みである。

だとするなら、自らを利するために他人を道具として利用し弄んだ手紙が策士オクタービオによって、剛直一途な兵の自尊心を刺激して皇帝側に寝返らせるための手段として逆利用されたことになる。部下に対するヴァレンシュタインの背信行為はブーメランのように彼自身に跳ね返り、自らの命を奪う結果に繋がったのである。

先に述べたようにオクタービオはブトラーを焚きつけるに当たって「ヴァレンシュタインは陛下への恨みを掻き立てることで君を陛下から引き離そうとしたのだ(中略)卑劣にも君をただの道具として、邪悪な目的のための手段として利用しようとしたのだ」と言い、自尊心を傷つけられたブトラーは將軍暗殺を執拗につけ狙う復讐者へと豹変する。

4. 道具として使い捨てられた者の屈辱と復讐

興味深いのはこの構図がヴァレンシュタインの皇帝に対する謀反の経緯と重なることで

ある。

ヴァレンシュタインは、既に紹介したように 1630 年 8 月レーゲンスブルク帝国諸侯会議で軍税制度による領民疲弊の責任を取らされ、数多の殊勲を上げていたにもかかわらず総司令官を罷免された。「皇帝のわしに対する扱いはひどいものだった」(P. I.5)と云い「生贄にされた(aufgeopfert)」という表現さえも彼が二度(P II.7), (WT.III.15)使っていたことも既に述べた通りである。

ドラマのヴァレンシュタインは確かに思弁的、内省的な方向へと変えられているが、いくら和らげられたとはいえ「彼の野心は限りなく、自尊心は鋼のごとく、復讐することなく侮辱を耐え忍ぶなどあり得ないほどの矜持の高さ」と評された歴史書のヴァレンシュタインの DNA は歴史劇のヴァレンシュタインにも確実に受け継がれている。

これを刺激するのがイッローやテルツキ夫妻の役割である。間諜ゼジーンが捕らえられスウェーデン軍に宛てた密書が宮廷側の手に渡ったことによって彼の企みがすべて相手に知られてしまったその期に及んでもなお「忠義だの良心だのとほざいている」(WT. I.7)ヴァレンシュタインに呆れかえったテルツキ伯爵夫人によって 2 年前レーゲンスブルクでの皇帝の裏切りによる屈辱的罷免を想起させられ、今さら忠君だの義務などの話ではない、「勝てば官軍、赦されるのよ」(WT. I.7.)と煽られ、自尊心をさんざん刺激されたあげくようやく彼は肚を固めた。

「皇帝の邪鬼とわしの邪鬼の戦いだ(Es ist sein böser Geist und meiner)。わしは皇帝の権勢欲の道具(das Werkzeug seiner Herrschsucht)として利用されたのだ、そのわしを通して邪鬼が皇帝を罰するのだ」(WT. I.7.) [傍点引用者]

「ただの道具として、邪悪な目的のための手段として利用」されたブトラーの憤りは「皇帝の権勢欲の道具」としてさんざん利用されたあげく使い捨てにされたヴァレンシュタインの屈辱感に重なる。信頼を裏切られ自尊心を傷つけられたことへの怒りがヴァレンシュタインの謀反にもブトラーの將軍暗殺にも共通するのである。

ブトラー/ヴァレンシュタインの関係はヴァレンシュタイン/皇帝の関係のミニ版であり、歴史書における「忘恩」の対構造に代わって、ドラマでは〈裏切り(人間の道具的利用)から復讐へ〉の連鎖が入れ子細工の造りになっている。自分を勢力拡大の道具として使い捨てた皇帝に対して謀反を企もうとしたヴァレンシュタインは、かつて彼自身が自陣営強化のために道具として利用した部下によって復讐される。「お前は復讐の悪鬼に駆り立てられている、気を付けるがいい、お前自身が復讐の餌食にならぬようにな」(WT.IV.1.)とブトラーは呟いている。

道具の利用から復讐に至るパターンが同じというだけではない。ヴァレンシュタインとブトラーはともに「復讐することなく侮辱を耐え忍ぶなどあり得ないほどの」自尊心の強さという点でも共通している。ブトラーは自らを「名誉を重んじる男(der Mann/Von Ehre)」(WT. II.6)と呼んでいて、侮辱、即ち、人格を傷つける言葉や行為に対してきわめて敏感である。注目すべきは、伯爵位申請拒否をめぐるオクタービオ/ブトラーの対話の中に

kränken, Kränkungという単語が繰り返し出てくることである。

ブトラーは名誉欲に負けて勧められるまま伯爵位申請の書類を出した自分の弱さ、愚かさを恥じている。しかし

私にだって名誉心はあります。見下されるのは我慢ならなかったのですよ。軍隊では生まれや肩書の方が実力より物を言う、これが辛かったのです。同輩に負けたくなかった。心の隙に付け込まれ、ついうかうかと伯爵位申請など提出してしまったのです。愚かなことを！でもこんなにひどいしっぺ返しを食らおうとは！却下するのは分かります。でも同じ断るにしてもどうしてああまでひどく私を見下し傷つけるようなことを言って (Mit dieser kränkenden Verachtung) 足蹴にするようなまねをするのでしょうか。つい魔が差して身の程を忘れたからといって、生まれの卑しいことを口汚く罵り、ながく忠勤に励んできたこの老骨をひどい嘲りの言葉で打ちのめすとは！好き勝手に踏んづけられりゃ、虫けらにだって棘ぐらいあります(WT. II. 6) [傍点・強調引用者]

ここで宮廷に向けられていたブトラーの怒りをオクタービオは例の手紙を見せることによってヴァレンシュタインへと向け変えたのだ。注目すべきはブトラーを寝返らせるにあたって本人が口にしたKränkungを二度使っていることである。「フリートラント公こそが君の気持を傷つけた張本人なのだ(Dem Herzog schreibt allein die Kränkung zu./Die Ihr empfangen)。意図ははっきりしている。君を陛下から引き離したかったのだ —、陛下への恨みを抱かせることでね。(中略) 卑劣にも君をただの道具として、邪悪な目的のための手段として利用しようとしたのだ」 (WT. II. 6)

Kränkungという語を用いるだけでなく、ブトラーをただの道具として弄び、手段として利用したと主張することで自尊心を刺激するやり方も相手の急所を突いた巧みな戦略である。更に「公はうまくやったものだ。40年間君が歩んできた忠君の道から君を逸らせることにまんまと成功したのだから」と言い、「そんな私を陛下はお赦し下さるでしょうか」と問うブトラーに「お赦しになるどころか、立派な臣下が不当にも被った辱め(Kränkung)の償いをして下さるのだよ」[傍点引用者](WT. II. 6)と、ここでもKränkungを強調している。

興味深いのは劇中他にkränken, Kränkungが使われるのがヴァレンシュタインに関わる場合だけであることだ。マックスは総司令官が「さんざん辱めを受けた (Kränkungen)」[傍点引用者](P.IV1), 「宮廷は公をいたく侮辱した(empfindlich ihn beleidigt¹⁵)のです」[傍点引用者](PV1)と言っているし、いつまでも煮え切らない義兄フリートラント公を挑発するに際してテルツキ伯爵夫人は「陛下から受けたちっぽけな恩恵のことはいちいち覚えていらっしやるくせに、受けた辱め(Kränkung)の方はお忘れになったのかしら。貴方の忠君

¹⁵ beleidigen は kränken とほぼ同義。

の偉業がレーゲンスブルクでどんなひどい報われ方をしたか私が思い出させてあげないといけないのかしら」[傍点引用者](WT. I. 7)と言っている。そこでヴァレンシュタインも、グスタフ・アドルフ率いるプロテスタント軍に追い詰められた皇帝に乞われて再任された時のことを思い出し、「いよいよ困り果てたあげく、ひどい辱めを受けたわしの前に(vor dem Schwergelkränkten)尊大な皇帝が膝を屈して助けを乞うてきた」[傍点・強調引用者](WT. III. 13)と述懐する。

テキストのこれらの箇所にもわれわれはおおらかさや寛容の欠如を、「立派とは言い難い復讐心と執念深さ」(G. 688)という人間の度し難い業、罪深さを、読み取るべきなのであろうか。それも一つの解釈であり、正しいであろう。しかしそういう道徳的な読みとは別に、道具的に利用され使い捨てにされた人間の屈辱と憤りの中に、踏み躪られた基本的人権の抗議を、人間的尊厳と権利の主張を読み取るという選択肢もあるのではないだろうか。そういう扱いを受けた時の悔しさや憤りは最高指揮官であろうとたたき上げの一将兵であろうと人間皆に共通するのである。

いささか唐突ではあるが、ここで「人間の美的教育について」第27書簡から次の一節を引用することをお許しいただきたい。

美的国家においては万人が — たとえ道具として使われる下々の者(das dienende Werkzeug)であろうとも、最も高貴な者と同等の権利を有する自由な市民であり、下積みの一般大衆を我が目的のために横暴に思い通り使役しようとする支配者といえども、美的国家においては、民衆一人一人の本来の資質や使命に耳を傾けなければなりません。したがってこの美的仮象の国においては平等の理想が実現されるのです [傍点引用者]¹⁶

ここに抽象的な言葉を連ねて述べられていることは、フランス革命の人権宣言に言う「人は、自由かつ諸権利において平等なものとして生まれ、そして生存する」と基本的に同じ内容である。革命が生んだジャコバン派独裁の恐怖政治によって人権宣言は踏み躪られてしまい、この事態に危機感を募らせて書かれたのが「美的教育論」だった。しかし革命がどのような結末に至ろうとも人権宣言の理想まで否定されたわけではない。シラー論文はこの理想を政治社会革命とは別のやり方で実現しようとしたものである。

¹⁶ Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen. In Friedrich Schiller Sämtliche Werke Band V. München, Wien 1985. S.669. 拙訳は意訳(解釈)なので、以下に原文を掲げる。

„In dem ästhetischen Staate ist alles – auch das dienende Werkzeug ein freier Bürger, der mit dem edelsten gleiche Rechte hat, und der Verstand, der die duldende Masse unter seine Zwecke gewalttätig beugt, muß sie hier um ihre Beistimmung fragen. Hier also, in dem Reiche des ästhetischen Scheins, wird das Ideal der Gleichheit erfüllt“

ところで、史劇を読み終えたヘーゲルは不快の念を禁じえず、「これは生に対する死の勝利だ。悲劇的というより物凄く怖ろしい(entsetzlich)! 胸(Gemüt)が引き裂かれ、気を取り直して立ち上がることすら出来ない」と書き記したという。¹⁷

確かにこの史劇に描かれているのは徹底して地上的人間的な確執と権力闘争であって、超越的絶対者による正義の裁きなど入り込む余地のない相対的な世界である。ルカーチが近代小説を神なき時代の叙事詩と呼んだことはよく知られているが、このシラー史劇も大団円(正義や秩序の回復)のない神なき時代のドラマなのかもしれない。

だが一見救いがないかに見えるヴァレンシュタイン暗殺の幕切れにも、人間の権利や尊厳を平等とする民主主義の基本がネガの形で埋め込まれているのではあるまいか。道具的に利用され使い捨てられたことに対して人間が抱く屈辱感と憤りは身分の上下を問わないということである。

ただここで見逃してならないのは、皇帝をめぐるヴァレンシュタインとブトラー両者の立ち位置の違いであろう。皇帝の裏切りによって傷ついたヴァレンシュタインの謀反は大逆罪として誅罰せられ、ブトラーは皇帝によるヴァレンシュタイン討伐に自らの復讐を重ねることで本懐を遂げることが出来た。司令官を便利な道具として使い捨てた皇帝だけは咎めを受けることがない。これは「たとえ道具として使われる下々の者であろうとも、最も高貴な者と同等の権利を有する(mit dem edelsten gleiche Rechte hat)自由な市民であり...」と矛盾するのではあるまいか。皇帝は「歲月の力によって神聖化され、習慣の中に根付き、素朴な民衆に崇められ、(中略)畏れ多い存在と見なされ」、「盤石の王座に君臨する権力」(WT. I. 4)、どんな批判も抗議も届かない超越的次元に鎮座まします無謬の存在なのだ。シラーは君主制擁護者だったが、司令官のかのモノローグの中で君主なるものの権威の秘密を分析することによって、はからずも君主制の根拠の非論理的曖昧さを暴いてしまったのかもしれない。

ともあれ、このような体制・秩序の中で皇帝に反旗を翻すことは犯罪であり、待ち受けるのは敗北しかないことをヴァレンシュタインは百も承知していた。第三部第一幕で既に彼は「破滅(謀反[訳者注])に至る最後の一步を踏み出すのを避けるためなら犠牲も危険も怖れはしない」と言っていたが、すぐに続けて「あんなに華々しく登場しておきながら、こんな惨めな終わり方をするくらいなら、無名に沈むくらいなら、一日天下で終わる陽炎みたいな哀れな奴らと一緒にされるくらいなら、後世に至るまで皆がわしの名前を吐き捨てるように口にしてくれる方がまし、フリートランドの名がありとあらゆる呪わしい行為を呼ぶ合言葉となるがいいのだ」(WT. I. 7)とも言っていた。

敗北を覚悟した逆賊、アンチヒーロー、ダークヒーローの台詞である。

親友ヴァレンシュタインを欺くことでその反乱を未然に防いだ功績によって忠臣オク

¹⁷ Müller-Seidel, Walter: a.a.O. S.143.

Peter André-Alt. a.a.O. S.461.

タービオ・ピッコローミニは侯爵に叙せられるが、その幕切れの場面に漂う微妙な空気からは、単に友人を踏み台にして出世したオクタービオに対してだけでなく、封建的君臣関係の論功行賞の空しさ、栄光のしらじらしさをも感じ取ることが出来る。オクタービオ最愛の一人息子マックスは、皇帝への忠誠の誓いとヴァレンシュタインへの恩愛の狭間で苦悩し、自決に等しい戦死の道を選んだ。栄冠に輝くオクタービオはかけがえのない跡継ぎを失った天涯孤独の父親である。

皇帝もまた謀反の息の根を止めることに成功はしたが、オーストリア軍最強の指揮官を失ったことで、軍と国家の弱体化を覚悟しなければならない。

5. ein treffliches Werkzeug, Staatskunst, Staatsklugheit

先ほど引用した「美的教育について」で批判されているのは人間の恣意的な使役であって、道具的利用そのものではない。道具として使う相手の「資質や使命」を尊重することの重要性が指摘されている。

1630年レーゲンスブルクにおけるヴァレンシュタイン解任劇の黒幕は実はバイエルン選帝侯マキシミアンだけではなかった。フランスの宰相リシュリュー枢機卿もこれに絡んで暗躍した。歴史書にはIntrigue, Betrug und Listといった言葉まで出て来る。(G.488f.) この名将を総司令官の座から引きずり下ろすことが仇敵オーストリア・ハプスブルクの軍事力を弱体化させる最善の策だったからだ。(G.488f.) フランスにとってはまさにStaatsklugheit(国家の将来を見据えた賢明な政治)である。その際 Josephという敏腕のカプチン僧をロビイストとして使節団に加え、この僧が水面下で見事な働きをしたというところでein treffliches Werkzeug(G. 488)という表現が出て来る。ドラマに見られる道具的利用の陰湿な意味合いはそこにはない。staatsklugなStaatskunst(政策・政治的手腕)によって使われる有能な人材とその目覚ましい働きをこれは意味する。

枢機卿リシュリューは国王ルイ十三世(アンリ四世の息子、太陽王ルイ十四世の父親)に仕えた。17世紀前半フランスの政治的リーダーである。『三十年戦争史』では暗殺された名君アンリ四世の遺志を継ぐ優れた政治家として評価されている。(G.452) 彼はフランス・ファースト、国民国家建設のためには如何なる犠牲をも厭わなかった。国内では国家統一の妨げになる新教徒(ユグノー)を弾圧し、国外ではフランス統一国家建設の邪魔になる両ハプスブルク(スペイン、オーストリア)を弱体化するために、カトリック国であるにもかかわらず、敵側新教軍に味方し、プロテスタント国家スウェーデンの国王グスタフ・アドルフの参戦をも後押しして資金援助を惜しまなかった。三十年戦争の陰の立役者、フィクサーである。

戦争が長引いてドイツが疲弊し、宗教的分裂が深まり、ハプスブルク・スペインが斜陽国家となり、神聖ローマ帝国が四分五裂すればするほど国外からの干渉は弱まり、フランスの統一国家建設にとって有利となり、欧州の主導権を掌握できるのである。ドイツ人にとっては憎んで余りある政治家だったにもかかわらず、シラーはその歴史書の中で30

回近く彼の名前を挙げ、時として少なからぬ賛嘆の念を隠さずその活躍ぶりを報告している。

『三十年戦争史』における国家間、権力者間の入り組んだ利害関係や思惑、政治家たちの虚々実々の駆け引きの描写は精彩に富んでおり、Staatskunst, Staatsklugheit, staatsklug, といった言葉が積極的な意味合いをもって使われているが、ドラマになった途端、Staatskunst はピッコローミニ父子の対話場面で一度だけ話題となる(P.V.3.)ものの、ヴァレンシュタインを謀る計略とか策謀といった意味に矮小化され、真直なマックスの批判を浴びるレベルである。staatsklugもStaatsklugheitもドラマには一切出てこない。

戦争継続か和平かにしても、リシュリユーにとってはフランスの統一国民国家建設という大目標を基準にして方針が決められるのに対して、ドラマにおいてはマックスの理想主義的ヒューマンズム(「オーストリアが勝ち取りたい領土の大小なんかよりヨーロッパ全体の幸せと繁栄の方が大切」)や、君臣間、並びに臣下どうしの不信と軋轢・抗争に焦点が合わされ、大きな国際的・歴史的展望を欠いた狭小な政争劇に狭隘化されてしまう。

神聖ローマ帝国もオーストリア、ドイツも皇帝フェルディナント二世もヴァレンシュタインもバイエルン公マキシミリアンもグスタフ・アドルフさえも皆リシュリユーの奸智によって踊らされる操り人形の如くである。『三十年戦争史』に描かれている国際政治上の駆け引きや裏工作が除外されたことで、ドラマはダイナミズムを失い、裏切りから復讐への内政的、あるいは個人的抗争劇へと矮小化された。

真の悲劇はフランスのリシュリユー枢機卿に匹敵する憂国の賢者がドイツにいなかったことである。このような内輪もめがドイツにとって不利であり、ヴァレンシュタインのような名将の命を奪うことは他国を利するだけで、自国にとっての大なる損失であるという程度の計算が出来る政治家がドイツにはいなかった。

フランスは程なく絶対専制君主ルイ14世の下、統一国民国家が花開き、ドイツはなお2世紀以上にわたって小邦乱立の分裂状態が続く。

忠義か謀反か、暴君殺し如何の問題にしても、三十年戦争の時代にあっては、統一国家建設のために君主を中心に国民が一つに纏まることが賢明な策であった。しかし神聖ローマ帝国皇帝は7人の選帝侯によって選ばれる仕組みで、選帝侯や彼らと利害関係を有する諸侯らの思惑によって皇帝が首根っこを押さえられる構造になっていたため、¹⁸ 君主を中心にした国家統一など夢のまた夢であった。互いに利害を主張し合う中小の領邦割拠の上に更に宗教的分断が加わったから、なおさら分裂と内紛が宿命の構造が出来上がっていた。ドラマ『ヴァレンシュタイン』はほぼ有名無実な幻想国家「ドイツ民族の神聖ローマ帝国」なるものの出口の見えない分裂状態というドイツの政治的貧困の代表的一例を描いたものではあるまいか。だとすれば、ヘーゲルが気を滅入らせたのもむべなるかな、と

¹⁸ 諸侯が皇帝にヴァレンシュタインの解任を迫った際の駆け引きを思い起していただきたい。

言うべきかもしれない。

人間の道具的利用に関しても、『三十年戦争史』でのリシュリユーの真骨頂は自国の利益のためには躊躇うことなく他人や彼らの利害関係を巧みに利用し操るところにあった。人に関しては適材適所で。国際政治は力と力だけでなく、知恵と知恵のぶつかり合う闘技場であり、¹⁹ まさにStaatskunst, Staatsklugheitが競い合う、時として流血を伴うゲームである。自由で独立した人格を有する他者を手段として利用してはならない、というカントの定言命法はあまりにも観念論的に過ぎ、賢明な政治は常に日常的道德を超えたところにある。歴史書『三十年戦争史』では生き活きと躍動していた政治的知恵と心意気が歴史劇『ヴァレンシュタイン』からは除外されてしまった。

¹⁹ マキアヴェッリは君主たる者ライオンの強さと狐の狡賢さを兼ね備える必要があると説いている。cf. 塩野七海: マキアヴェッリ語録. 新潮文庫. 2003年 75頁以下。

Schillers *Wallenstein*. Über die Benutzung des Menschen als Werkzeug Von der historischen Schrift zum historischen Drama

Tomotaka TAKEDA

Zum Regensburger Fürstentag 1630 hat der Kaiser den verdienstvollen Kommandanten Wallenstein, der dem Thron treu gedient hatte, unerwartet abgesetzt. Das von ihm eingeführte Brandschatzungs-System, eine Art Steuerwesen zu Kriegszeiten, hatte das Volk so schwer belastet, dass dessen Beschwerden unwiderstehlich waren. Dabei hatte ihn die fehlende ökonomische Unterstützung vonseiten des Kaiserlichen Hofes zu dieser harten Kriegssteuer gezwungen. Aber alles nur, um den Kaiser groß zu machen! Dessen ungeachtet wälzte der Hof die Verantwortung auf ihn allein ab, wodurch der Kaiser, der Wallenstein als „Werkzeug seiner Herrschsucht“ gebraucht und achtlos hatte fallen lassen, dessen Zorn auf sich ziehen musste. Er spricht sogar zweimal von „aufgeopfert“. Der wieder zum Heldherrscher ernannte Wallenstein möchte den Stab „nicht mehr zur Vergrößerung des Einen“, sondern „zur Wohlfahrt aller, zu des Ganzen Heil“ führen. Er sucht den Frieden, aber sein Pazifismus ist eine Antikriegs- und zugleich eine Anti-Kaiser-Haltung. Wallenstein hat sich wegen seines Hochverrats in Verdacht gebracht und dadurch den Befehl des Kaisers, ihn lebend oder tot zu fangen, ausgelöst.

Über den Meuchelmörder Wallensteins und seinen Anlass steht in Schillers historischer Schrift *Geschichte des Dreißigjährigen Kriegs*: „Indem der Herzog von Eger aus die Unterhandlungen mit dem Feinde lebhaft betrieb, die Sterne befragte und frischen Hoffnungen Raum gab, wurde beinahe unter seinen Augen der Dolch geschliffen, der seinem Leben ein Ende machte. Der kaiserliche Urtheilsspruch, der ihn für vogelfrei erklärte, hatte seine Wirkung nicht verfehlt, und die rächende Nemesis wollte, daß der *Undankbare* unter den Streichen des *Undanks* erliegen sollte. Unter seinen Offizieren hatte *Wallenstein* einen Irländer, Namens *Leßlie*, mit vorzüglicher Gunst beehrt und das ganze Glück dieses Mannes gegründet. Eben dieser war es, der sich bestimmt und berufen fühlte, das Todesurtheil an ihm zu vollstrecken und den blutigen Lohn zu verdienen.“

Es versteht sich, dass Leßlies Akte die „Streiche(n) des Undanks“ genannt sind. Aber warum ist Wallenstein „der Undankbare“? Das kann durch die folgende Beschreibung, die kurz zuvor erscheint, erklärt werden. „--- an dem Pflichtgefühl seiner Truppen scheiterten alle seine (*Wallensteins*) Berechnungen. Berauscht von dem Ansehen, das er über so meisterlose Schaaren behauptete, schrieb er alles auf Rechnung seiner persönlichen Größe, ohne zu unterscheiden, wie viel er sich selbst, und wie viel er der *Würde* dankte, die er bekleidete. Alles zitterte vor ihm, weil er eine rechtmäßige Gewalt ausübte, weil der Gehorsam gegen ihn Pflicht, weil sein Ansehen an die Majestät des Thrones befestigt war. Größe für sich allein kann wohl Bewunderung und Schrecken, aber nur die *legale* Größe Ehrfurcht und Unterwerfung erzwingen. Und dieses entscheidenden Vortheils beraubte er sich selbst in dem Augenblicke, da er sich als einen

Verbrecher entlarvte.“

Er überschätzte sich selbst und beging Hochverrat, indem er alles auf seine eigene Stärke setzte, obwohl sein Glanz auf die Autorität des Kaisers gestützt war.

Der „Undankbare“ ist der Hochmütige. Des Herzogs Schuld ist Hybris, deshalb „die rächende Nemesis“.

Im Drama ist es mit dem Mörder und seinem Beweggrund ganz anders. Buttler, der sich „vom niedern Dienst im Stalle“ zum Chef eines Dragonerregiments emporgearbeitet hat, schwärmt für Wallenstein. Auf dessen Rat hin hat er beim Wiener Hof um den Grafentitel ersucht, wurde aber brüsk abgewiesen, was ihn bitter gekränkt hat. Octavio Piccolomini, der treue Untertan, der den kaiserlichen Befehl ausführen soll, erinnert ihn daran, denn er muss so viele Offiziere als möglich auf seine Seite bringen. Buttler ist der Überzeugung, der Herzog habe sich „mit edler Freundeswärme“ für ihn verwendet. Aber Octavio zeigt ihm einen Brief, in dem sein Empfehler Wallenstein selbst dem Minister rät, Buttlers Dünkel zu züchtigen. Der Herzog wollte Buttler vom Kaiser losreißen, indem er den Hof eine böse Rolle spielen lässt. Der Fürst „hat mit Euch ein schändlich Spiel getrieben. (---) Zum blinden *Werkzeug* wollt er Euch, zum *Mittel* verworfener Zwecke Euch verächtlich brauchen“, stellt Octavio fest. Buttler, der den Brief las, war bestürzt, schwer gekränkt, und bekehrte sich zum Anti-Wallenstein.

Ob der Brief echt oder falsch ist, muss überprüft werden, denn in *Räuber, Kabale und Liebe* und *Don Karlos* haben fingierte Briefe große Rolle gespielt haben. Vom Text aus ist das nicht eindeutig zu entscheiden. Aber in der *Geschichte des dreißigjährigen Kriegs* beschreibt Schiller, wie Wallenstein mit Oberst Illo das gleiche Spiel spielt, mit dem er im Drama Buttler betrügt. Er habe „auch die niedrigsten Mittel nicht verschmäht, (---) die Zahl seiner Anhänger zu vermehren“, heißt es dort. Ohne diese Umstände wäre die Buttler-Geschichte im Drama nicht denkbar. Die kritisierende Beurteilung „die niedrigsten Mittel“ in der historischen Schrift hat im Drama, so lässt sich annehmen, in der Buttler-Handlung konkrete Formen angenommen.

Wenn die Vermutung richtig ist, so wurde der Herzog im Drama für die frevelhafte Benutzung des Menschen als Werkzeug bestraft. Hier ist keine Rede mehr von Hybris und „Nemesis“.

Übrigens ist der dramatische Wallenstein in der Tat bedächtiger als der historische. Er spricht mit sich selbst: „Du willst die Macht, / Die ruhig, sicher thronende erschüttern, / Die in verjährt geheiligtem Besitz, / In der Gewohnheit festgegründet ruht, / Die an der Völker frommem Kinderglauben / Mit tausend zähen Wurzeln sich befestigt.“ Er glaubt, die „fromme Treue“ beschütze ihn am sichersten. Den zaudernden Herzog hetzen Illo, Herr und Frau Terzky zur Ausführung des Plans auf. Es ist aber auch nicht zu übersehen, dass von Wallenstein in seinem Monolog die Struktur der Kaisersmacht analysiert und deren Geheimnis an den Tag gebracht worden ist. Dann ist der Hochverrat nicht mehr Undank noch Hochmut, sondern Unbedacht.

Beachtet soll es werden, dass sich Buttler an Wallenstein rächt aus demselben Motiv, aus dem

heraus dieser sich an dem Kaiser rächen wollte, weil der ihn als „Werkzeug seiner Herrschsucht“ benutzt und weggeworfen hat. Buttler meint: „Die Menschen wußt er (Wallenstein), gleich des Brettspiels Steinen, / Nach seinem Zweck zu setzen und zu schieben, / Nicht Anstand nahm er, andrer Ehr und Würde / Und guten Ruf zu würfeln und zu spielen.“ Von der willkürlichen Instrumentalisierung anderer wird sowohl der Herzog wie der Untergeordnete unabhängig von Stand und Status gleich gekränkt. Könnte man im anscheinend düstern Dramenende, im Negativbild, nicht die Idee der Demokratie, der Gleichheit der Menschen Rechte und Würde und das Ideal der Freiheit aller Menschen erkennen?

In Schillers *Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen* liest man: „In dem ästhetischen Staate ist alles – auch das dienende Werkzeug ein freier Bürger, der mit dem edelsten gleiche Rechte hat, und der Verstand, der die duldende Masse unter seine Zwecke gewalttätig beugt, muß sie hier um ihre Beistimmung fragen. Hier also, in dem Reiche des ästhetischen Scheins, wird das Ideal der Gleichheit erfüllt“

Der Text sagt letztendlich dasselbe aus wie *Die Menschenrechte Erklärung der Französischen Revolution*:

„Menschen werden frei und gleich an Würde und Rechten geboren und bleiben es.“ Die Revolution scheiterte an der Jacobinischen Schreckenherrschaft. Aber die *Die Menschenrechte Erklärung* wird nicht geleugnet. Zu deren Verwirklichung waren Revolutionäre und Bürger noch nicht genug kultiviert, noch nicht reif dazu. Vom Krisenbewusstsein getrieben hat Schiller zur Verfeinerung der Menschen den Briefformaufsatz verfasst.

Uns interessiert, dass der zitierte Text nicht die Benutzung des Menschen als Werkzeug selbst verneint, sondern nur die willkürliche gewalttätige Instrumentalisierung des Menschen, obwohl Schiller als Kantianer bekannt ist und Kants berühmten Kategorischen Imperativ „der Mensch sei Selbstzweck, nicht als Mittel zum Zweck zu benutzen“ weiss. Schiller glaubt: Bei der Benutzung des Menschen solle der rechte Mann an der rechten Stelle sein, man solle auch des dienenden Menschen Veranlagung, Willen, „Ehr und Würde“ achten.

In *Geschichte des Dreißigjährigen Kriegs* findet man den Ausdruck „ein treffliches Werkzeug“. Kardinal Richelieu, der französische politische Führer der ersten Hälfte des 17. Jahrhunderts, beabsichtigt zur Schwächung des Rivalenlands Österreichs die Absetzung Wallensteins. Denn mit „dem General, der sie zum Sieg geführt hatte, verloren die österreichischen Armeen den größten Theil ihrer Stärke; ganze Heere konnten den Verlust dieses einzigen Mannes nicht ersetzen. Ein Hauptstreich der Politik war es also, zu eben der Zeit, wo ein siegreicher König (Gustav Adolf) (--) sich gegen den Kaiser rüstete, den einzigen Feldherrn, der ihm an Kriegserfahrung und an Ansehen gleich war, von der Spitze der kaiserlichen Armeen wegzureißen.“ „Zu diesem Geschäfte hatte sich Richelieu in der Person des Capuciner-Paters Joseph (---) ein treffliches Werkzeug auserlesen.“ Die Tätigkeiten des französischen Intriganten, der für die Deutschen überaus

verabscheuenswert sein musste, beschreibt Schiller fröhlich nicht ohne Bewunderung. Darin sieht er möglicherweise die staatskluge Staatskunst, an der es den deutschen Politikern mangelt.